

第11回

西アジア・中東の新展開

監修・講師
 羽田 正

学習のねらい

7世紀初めのアラビア半島で、ユダヤ教、キリスト教という一神教の系譜の上に、イスラームと呼ばれる新しい宗教が生まれた。今回は、まず、イスラームが誕生した経緯とその教義の概要を学ぶ。そして、この宗教がなぜ短い期間にアジア・アフリカ・ヨーロッパの広い範囲に広がったのかを考え、8世紀に建設されたアッバース朝の都バグダードの繁栄について知る。

- ・ <イスラームの教え> メッカ ムハンマド ウンマ（共同体）
 コーラン 一神教 偶像崇拝の禁止
- ・ <イスラームの広がり> カリフ（後継者） 正統カリフ時代
 ウマイヤ朝 人頭税（ジズヤ） 土地税（ハラージュ）
- ・ <カリフとスルタン>
 アッバース朝 バグダード マムルーク（奴隸軍人） セルジューク朝

■ ■ ■ イスラームの教え ■ ■ ■

イスラームを創始した**ムハンマド**は、この世は必ず終わり、その時、唯一の神による最後の審判が行われると語った。この点は、ユダヤ教、キリスト教と共通している。一方、最後の審判を経て楽園に赴くためには、ムハンマドに伝えられた神の言葉に従って生きなければならないこと、神はその言葉を人々に伝える最後の預言者として自分を選んだことも説いた。この部分は、ユダヤ教、キリスト教とは異なっている。ムハンマドの教えを受け入れた人々をイスラーム教徒（ムスリム）と呼ぶ。

ムハンマドの死後にまとめられた『**コーラン**』には、ムハンマドを通じて下った神の言葉（啓示）が収められている。ムスリムは、できる限り啓示に従って生きることを求められた。イスラームとユダヤ教、キリスト教は、いずれも唯一の神を信仰する**一神教**であり、教義にも多くの共通点がある。ムハンマドは、『**聖書**』に現れる預言者とその言葉を認めたくて、自分が最後の預言者だと語った。3つの宗教はよく似ているがゆえに、現在に至るまで信徒たちの間で争いが絶えないともいえるだろう。

■ ■ ■ イスラームの広がり ■ ■ ■

ムハンマドの死後、ムスリム共同体の指導者は**カリフ（後継者）**と呼ばれた。**正統カリフとウマイヤ朝**カリフの時代にかけて、主としてアラブ人ムスリムからなる軍隊が、東は中央アジアや北インドから西はイベリア半島までの広大な空間を征服した。「聖戦」という強い目的意識を持ち規律正しいアラブ人ムスリムの軍隊は、無敵だった。西アジア・中東の強国だったササン朝ペルシアは滅び、ビザンツ帝国はエジプトやシリアを失った。

ムスリムの支配者は、異教徒に課せられる**人頭税（ジズヤ）**^{じんとうぜい}を支払えば征服地の住民が旧来からの信仰と儀礼を維持することを許した。このため、彼らは多くの場所で「解放軍」として迎え入れられた。しかし、支配者であるムスリムと被支配者の非ムスリムとの間には、人頭税以外にもさまざまな差別があった。また、新たな政治や社会の仕組みは、イスラームの考え方を基本として整備された。このため、被征服者の人々の中で、イスラームに改宗する人の数が次第に増えていった。

■ ■ ■ カリフとスルタン ■ ■ ■

8世紀に成立した**アッバース朝**カリフ政権は、ティグリス川のほとりに新しい都**バグダード**を建設した。アッバース朝では、非アラブ人もムスリムであれば、人頭税が免除され、アラブ人であっても土地税が徴収されるなど民族間の不平等な制度は廃止される。さらに、行政機構を整備してイラン人などを官僚に登用するなど、現地の実情にあわせた統治を進める。10世紀、イラン系の軍事政権**ブワイフ朝**が誕生し、バグダードに進出。アッバース朝のカリフを保護下において、カリフの委任を受ける形で統治を行う。アッバース朝は政治の実権を失った。

11世紀、イスラームに改宗したトルコ系遊牧騎馬民族の一団が**セルジューク朝**をおこし、1055年にブワイフ朝を倒してバグダードに入城すると、アッバース朝のカリフから「権力者」または「権威」を意味する「スルタン」の称号を授かる。これ以降、スルタンの称号は君主の称号として広く用いられるようになる。

考えてみよう 調べてみよう

- イスラームの教義とキリスト教の教義を調べて比較してみよう。
- 地図を見て、アラビア半島とメッカ、メディナ、ダマスカス、エルサレム、バグダードという都市の位置を確認しよう。
- 現代世界で、イスラーム教徒がたくさん住んでいる地域や国を探してみよう。